

一九九三年三月三十一日発行
横浜市史II 第一卷(上)抜刷

第三編第三章 教育

(第六節四 横浜^高工の「三無主義教育」とその影響)

前田一男

は、Y校の場合と同様に、引用の後に整理番号を付し、さらに横浜市内小学校出身者を「内」、横浜市外小学校出身者を「外」、不明を「?」として区別した。アンケート調査期間は一九九〇年一月から一九九一年一月にかけてである。アンケートの設問は割愛する。

- (4) 『フェリス女学院100年史』(一九七〇年)二四七―二九二頁。
- (5) 『横浜貿易新報』(一九三四年二月二二日)。
- (6) 『横浜貿易新報』(一九三三年七月一三日)。
- (7) 『昭和五年四月改正 文部大臣指定 フェリス和英女学校学則』第六条(自大二五年五月至昭一八年三月 認定指定私立各種学校(神奈川)第十一冊) 国立公文書館所蔵)。
- (8) フェリスでの影響と、ある意味で矛盾しない形で小学校時代の教育勅語を重視する記述も少数ながらあった。「軍国主義の最中に大きくなったのですが、それが悪かったとは思いません。日本人として一本筋が通っているのではないかと思います。忠君愛国など死語になってしまった感がありますが、私の好きな言葉です」(一内)といった記述も寄せられている。
- (9) 『横浜貿易新報』(一九三五年二月七日)。
- (10) 『横浜貿易新報』(一九二七年八月一四日)。

四 横浜高工の「三無主義教育」とその影響

校長鈴木達治の 横浜における高等教育の概観については「概説」でふれたが、五つあった専門学校のうち、

自由啓発実践 ここでは横浜高等工業学校(以下、横浜高工と略称)をとりあげたい。というのも、一九二〇

(大正九)年の開校以来、校長の鈴木達治(一八七一年―一九六一年)によって、三無主義という教育方針のもとに自由啓発の教育実践がなされたユニークな学校であったからである。鈴木校長は、一九三五(昭和一〇)年二月に

同校の校長を突然辞任することになるが、高等教育の場において、自由教育が採用された例は全国的にみても極めて稀であった。

ここでは、鈴木校長のあえて掲げた三無主義教育や自由啓発教育にどのような教育的な意味が込められていたのか、そしてそれが実際に学生たちいかに理解され影響を及ぼしていたのかについて、鈴木校長の主張とその教育を受けた学生の側からの両面からみていくことにしよう。⁽¹⁾

鈴木校長は、一九二一年一〇月の横浜高工開校式において、その教育方針を「本校は従来の採点的試験制度を断乎として廃棄致しました」⁽²⁾と強い調子で「無試験」「無採点」主義を断言した。また、「自己の責任を重んじ、自発的の勉強に由り其課程を卒へしめました故今日の如き盛典に際会し、其儀礼に相応しき各種賞品の授与特待生優等生の表彰等は全然行はぬ」⁽³⁾（「無罰無賞主義」一九二三年三月 第一回卒業式にて）と敢然と「無賞罰」主義を

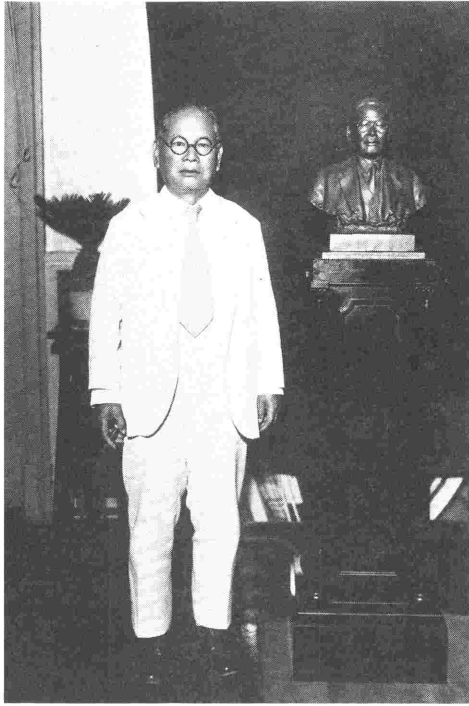


写真192 鈴木達治(1871~1961)

実行した。この無試験・無採点・無賞罰の三無主義が、開校当初から採用された自由教育の具体的な教育方針であった。このような三無主義を標榜したのは、教育界一般への批判があつたからである。つまり「詰込み主義、知識偏重主義、卒業証書万能主義」⁽⁴⁾への批判であり、さらに、専門学校が職業訓練を目的とする教育でしかないこと、またそこでの道徳教育が形式的な徳目を重視するだけの偽善的な人間をつくるこ

とにしか貢献していないことへの批判であった。

三 無主義の意味

鈴木校長は、まず試験の教育的効果に疑問をもつ。それは試験が学生から学ぶという営みかものだとする。鈴木校長は、孔子が弟子の顔回を高く評価する理由が、博識多聞であるからではなく学を好むからだとしている例を引いて、「すべて試験から解放されて、自ら好んで勉強し、更に進んで楽しんで勉強し得るならば、これに優るものはない⁽⁵⁾」と言ひ、続けて「学校教育は学を好み、学を愛し、学を楽しむ習性を賦与するものでなくてはならない⁽⁶⁾」と主張した。これは、いうまでもなく無試験によつて期待される教育的効果であつた。

横浜高工への入学試験も一九二八年三月から無試験制度を採用するという徹底ぶりであつた。⁽⁷⁾

「無採点」とは、無試験なのだから無採点になるという消極的な意味ではなく、いかなる方法によつても学生を採点しないという決意表明であつた。就職先に、席次や点数を添えて紹介するのは、製造物品に正札をつけて売り出すようなもので、品物なら正札に偽りがあるかどうかは簡単に証明できるが、自主と独立とを名譽とする人間を同じように扱うことはできない、それを学校が率先して行なうというのはおかしいことである、と鈴木校長は批判したのである。「自主と独立を名譽とする人間は、自己の価値を表示する正札を背負つて、就職の門をくぐることは、変に感ぜられる。「中略」今少し人間個性の尊重を考えないものか⁽⁸⁾」といふのである。それゆゑに横浜高工では誰もが一番で卒業していった。

「無賞罰」は、形式的道徳主義を金科玉条とする懲戒主義を打破するために実践された教育方針であつた。品行方正、学業優等の学生を賞品や賞状を授与して賞するのは「賄賂教育」であり、一方停学や退学をもつて学生を処罰するのは「失敗教育」であるときびしく断じる。「少数を罰して多数を懲らしめ或は少数を賞して多数を奨励すると云ふが如き方法よりも、之を懲らさず之を賞せずして、全校を挙げて相互理解に導き、自治自覚の下に

教育し又教育せられる」(「名教は自然なり」一九二五年三月 第三回卒業式にて)⁽⁹⁾のが本来の姿なのだ、と鈴木校長はいう。特に、停学、退学にかかわる処罰を受けた学生は、鈴木校長の一五年間の在職期間を通じて、皆無といわれないまでも極めて少なかった。それは校則に触れた学生がいなかったという意味ではなく、学校側が処罰をしなかつたことによる。これは、罪悪を犯した学生を退学させることで校内が浄化されたとも、停学を命じることで学生が改悛するとも考えられないことを、鈴木校長が知っていたからであった。一九三〇年代の所謂思想問題についても同様の処置をとり続けた。

このような三無主義を教育方針とする自由教育の総称を、鈴木校長は「名教自然」と名づけた。「名教自然」という言葉は鈴木達治自身の造語で、横浜高工に赴任して間もなく「何かの拍子に名教自然と言ふ文字が頭に浮んだ(中略)言はば靈感⁽¹⁰⁾」であったという。「名教自然」の意味については、「名教自然は百貨店で、東京で云へば三越、横浜で云へば、野沢屋の様なものである。其処へ行けば、菓子類でも果物類でも、玩具類でも、子供の好きな何でも売っている。その様に名教自然の中には、釈迦も、キリストも、孔子も老子も居る⁽¹¹⁾」と比喻を用いて説明している。この「名教自然」という言葉は、後に述べるように教育の主体である生徒の「自覚」に限りない信頼と期待とを寄せつつ、教育実践に臨んでの条件整備に徹する鈴木校長の姿勢ないしは境地そのものの表現であった。自らの信念と教育実践とによって、次第に醸成されそして突然と精選された言葉が「名教自然」であったのである。

訓練よりも自覚

三無主義を教育方針に掲げるにあたって、いうまでもなく鈴木校長は「自由と云ふ意義」に注意を喚起している。自由とは決して放縱の意味ではなく、もちろん気配になる傾向でもない、これを混乱したなら教育の目的や修養の効果がなくなるのみならず、反対の結果を生みかねない、と力説している。(「自由教育の外輪」一九二〇年四月 授業開始に当たって)⁽¹²⁾そして自由が自由としての本来の意味をもちうる

ためには、「自覚」こそが必要であり、「学校教育の第一義は訓練にあらずして、自覚にあり、責任に直面して自覚する、研究に対して自覚する。困難に対して自覚せしむるにあります。然して自覚の要諦は自由啓発の学風を樹立するにありと信じて居ります⁽¹³⁾」と主張する。このように「自覚」は横浜高工の自由教育の根幹に触れる重要な意味をもっていた。そこには、当時の学校が軍隊教育よろしく訓練だけに重点をおいており、訓練の行き届いている学校ほど優良学校と考える向きがあるが、それは犬に芸を覚えさせるに等しいもので、訓練が無意味であるというのではなくその前提にまず自覚がなければ教育的には意味がないのだ、という批判が込められていたのである。無試験、無採点、無賞罰の三無主義を支えるのも、ひとえに「自覚」であり、判断のともなわない「訓練」ではなかったのである。

聴き書きによる 以上が鈴木達治校長の三無主義教育に込めた教育的意味の概略である。その主張に込められた**学生の日常生活** について批判やそれゆえに立てられた主義は、近代の学校教育がもつことになった矛盾を適確

に捉えており、今日においても通じる主義主張として説得力を持っている。しかしながら、いくら理想的な主張をしたとしても、その主張が実践されないかぎり、さらにその教育実践が学生に一定の影響ないし効果を及ぼさないかぎり、意味はなさないといえよう。とすれば、この三無主義教育を、学生たちはどのように受けとめ評価していたのだろうか。また、その影響や効果について如何に語っているのだろうか。当時の横浜高工の学校生活の実際も含めて、ここでも当時の学生からの聴き取りによって日常史を構成してみよう。

以下に登場する一二名の学生は、一九三四年と三五年とに横浜高工を卒業した人々である。鈴木校長の退任が一九三五年二月であるので、鈴木校長に直接薫陶を受けた最後の世代ということになる。⁽¹⁴⁾

さっそくアンケートの記述によりながら、三無主義の教育を検証していくことにしよう。なお、回答数や記述量は膨大にわたるので、全体的な傾向をおさえた上で適宜選択して紹介するにとどめたい。

入学試験 三無主義の「無試験」については、学生たちは入学試験から適用されていた。たしかに「無試験」

も無試験 であつたがゆえの強い印象が記されている。「面接試験だけで家庭について質問があり、ついで二三

の日本語の英訳のみで、それも易しく、簡単な入学試験なので驚き入り、今も印象に残っている」(三七電四外)というものである。具体的には「試験場には三ヶ所にテーブルが置かれ、夫々三人宛の教官が受験生と対面して腰掛けておられ、先ず第一のテーブルでは、当校受験の理由を問われ答えると、その答えをもう一度英語で答えるよう云われ即答させられた。第二のテーブルでは、多数の化学式の中からその物質名を聞かれ又触媒反応の意義及びその実例について問われた。第三のテーブルでは、数学の公式の誘導や証明などを即答させられた。全部終わると入口側中央部に置かれた机に移り、受験の感想文を書かされた」(九七電五神)という内容であつた。「面接による簡単なテスト位で判定出来るものか」(四五電四外)と感じる学生もおり、「中学の成績で決めていた様に思われた」(二五機四横)とか、「身体検査を重視している様に見受けられた」(二三応四外)とかの類推もされている。いずれにせよ「試験も受験する側の緊張をときほぐすように配慮され」(二六応四外)「教授との一対一の口頭試験であつた。物理の試験で、問題を解いた処、試験官の教授から『出来た、出来た。よく出来た』とほめられたことが、今でも頭のなかに鮮やかに残っている」(六〇造四東)というエピソードが語られている。一九三一年度の入学試験は「募集人員二〇〇名に対し受験者数総計二、〇五二人で、実に全国高工中第一の難関¹⁵」であつたのである。もっとも、建築学科は「デッサン(石膏像を木炭でスケッチ)が一日試験科目としてかなり重視された」(四七建四東)し、「昭和七年度の建築学科には受験生の希望に依つて筆記試験(数学、作文)を受けられる道もあつた。無試験では中学の成績が余程秀でないといふと合格は困難と思われたので、この方を選んだ。入試では特に忘れ得ない事は、作文の課題が『日本文化の変遷を論ず』とは技術専門学校の入試とはおよそ意外の課題に驚き」ととまどいを感じた」(一〇三建五外)といふ年度もあり、無試験といふ「試験方式は吾々の年度で終わり、次年

度から筆記試験を選択出来る様になった」(七六機五東)と、無試験を原則としながらもさまざまな試行錯誤が繰り返されていた。筆記試験が復活するのは、前述のように一九三七年度入学生からである。

実感した三無主義教育 入学してからの学校生活のなかで、三無主義教育や自由啓発教育は、そもそも実感さと鈴木校長からの感化 れていたのだろうか。これについては、アンケートで尋ねている。その回答は、何らか

の形で三無主義教育や自由啓発の教育を実感したと答えた者が一一二名中一〇六名(九五%)にもほった。ほとんどの学生が鈴木校長の教育方針を実感していたのである。実感しなかったとするのは、機械工学科と造船工学科の学生がほとんどであるが、その理由は主に無試験という原則が実現されていないことよっている。

それでは、実感した三無主義の内実とはどのようなものであったのだろうか。まず三無主義を唱えた鈴木校長から受けている影響についてみることにしよう。

学生たちは、入学時にさっそう鈴木校長から最初のインパクトを受けている。「入学式の校長のお話で『今日から君たちは、学生服を来た紳士である。その自覚をもって総てに対処されたい』という意味の話聞き、感激と希望に胸を膨らまし、これが自由啓発主義かと思った」(五八造四外)とその印象が語られる。それ以後卒業に至るまで鈴木校長自身が毎月定期的に行う「全校生徒を前にした大演説(特別講義)」(五機四東)が実施された。「いつも満員の盛況であり、生徒の物ごとの判断に対する自覚啓発に非常に役立った」(二機四外)というその内容は、例えば「自由とは責任が重い事、三無主義の意味、男女問題に対する責任」(四一電外)、「まーちゃん(麻雀)亡国論」と『出処進退を明らかにせよ』の二つ」(七五機五外)といった「職業教育のワクを越えた処世訓」(五機四東)であり、内容もさることながら「テーブルを叩いて熱弁をふるわれた姿」(二一機四外)「その姿、その態度、その気迫、それは先生の姿、警咳に接して始めて実感し得るものであった」(二九忠四外)。そのようなから自由啓発教育を「入学当初従来の固い中等教育から脱し切れないうで、如何にもグラフィナイ教育法だと誤解し」ていた学

生は「鈴木校長の君達には本校が最高学府で大学など進学する必要はないと自信に満ちて断言され、なるほどこれこそ個性を開発するに適した教育だと確信した」(四二電四外)という。最高学府という誇りと同時に、その将来像について「学校は基礎を教える処であり発展の可能性を授ける場所であるから、卒業したら一人前の技術者になったと勘違いしてはいけない。又高工を出たから技術者にならなければと考える必要もない」(六五機五神)という鈴木校長の考え方が、学校全体の伸び伸びした雰囲気を決めていたという。また「六ッ川町の校長宅での座談(毎週一回面会日を決め、夜生徒はだれでも鈴木校長に会いに行くことができた)」(五機四東)も特色ある生徒との接触であった。「三年生になつてからは足繁くお訪ねした。必ず紅茶とケーキが出た。五・一五事件には厳しい批判があった」(三三応四外)と、その時々時事放談が記憶されている。

自由な校風

このような鈴木校長の考え方は学校に自由な校風を生んでいた。「三無主義のため、学生全体がのびのびして居た」(二六機四横)「およそ官学としては想像も出来ぬ自由を満喫出来得た。これも校長の校是『名教自然』のあらわれ」(二〇三建五外)「強制されることなく、自主的に勉学出来たこと」(七八応五外)といった評価がしばしば登場してくる。自由な雰囲気は伝わってくる場として、校門や寮生活と図書室の利用が典型的に語られている。「学校出入りの門は扉がなく、又守衛もおらず開放されて居り、一般人の構内通り抜けは自由であった」(二六機四横)し、寮生活は「寮には寮監もなく、入寮者の自治運営で誠に和氣藹々としていた」(三四応四外)し、「寮生活は全くの自治で門限は無かつたし、問題も起こさなかつた。交替で大蔵大臣を勤めて食事の献立をつくり『まかない』に提出して好きなものが作ってもらえた」(一四機四東)のである。また図書室には「部数は多い方ではなかつたが、棚から自由に出して読めた図書室は、自分が最も自由の空気を味わつた小天地」(一五機四横)で、「オーナーシステムにて、自分一人一人が管理するのだから手続きなどは省略され、自由に勉強出来た」(二〇応四東)という。「当時一月元日、紀元節、天長節は三大節といつて学校では教育勅語と陛下の御真影

を押し式典が行われ、小学校は生徒に蜜柑やお餅が渡された。高工は三大節の式典はなく、在学三年間で入学式と卒業式だけ。それも入学式には入学したもの、卒業式には卒業するものだけ出席した。その時、校長が読んだ教育勅語は私製のもので書道家に書いてもらったものを二つ折りに表装したもの。よごれたら作り直せばよいと考えていた」(八一応五外)といった、形式にこだわらない校長の姿勢も校風の形成に無関係ではなかったであろう。「中学校の同級生が横浜高等商業へ来ていた。それで話し合ってみて、高工の方が自主自由な面が多いと思っ
た」(三二応四外)という評価と重ね合わせれば、横浜高工の「自由」の校風も説得力をもつ。⁽¹⁶⁾

三無主義教育

そのような校風のもと、三無主義のそれぞれはどのように実践されていたのだろうか。横浜高工はこの当時、機械工学科、応用化学科、電気化学科、建築科、造船工学科の五つの学科から

なっていたが、三無主義教育の受け取り方は、それぞれの学科によって微妙に異なっている。「鈴木校長の自由主義教育の思想の浸透は各学科毎に若干の差があ(教育方針に対する教授連の理解の差によるものと思ふ)」(八六応五東) ったという。

それは具体的には無試験という方針にかかわっていた。機械工学科や造船工学科の学生は「私達の学んだ機械工学科では半数以上の教授がほとんど毎時間(二時間続きの授業のあとの一時間)テストと称し、筆記試験が行われた。応用化学、電気化学は全くテストらしきものは無く、よく運動しよくあそんでいたので大変羨ましく思った」(六三機五横)、「造船工学科においては、特に無試験、無採点というようなことはなかった」(六二造四東)とい
い、応用化学科の学生は「自由主義教育が徹底していたのは応化だったように思える」(三六応四神)と自認している。三無主義を実感しなかったと回答した学生に機械工学科と造船工学科が多かったのはこのためである。同じく機械工学科の学生でも「三無主義が徹底され定期試験はなく生徒の自発的勉学を期待されたので、生徒はかえって自覚させられた」(二機四外)と述べており、個人々人によって試験の捉え方に違いがあったのであろう。「テス

トこそ無かったが毎日授業中に〇〇君と云って当てられる。その返答が出来ないようではまずいので予習は常に多忙であつた（無試験であつたが、よく進んで勉強した）（八機四外）としている記述が、機械工学科の平均的な回想といえるかも知れない。もつとも試験の方法それ自体が「機械科の教授の授業の効果測定（一般のテストに当てる）の際、図書室の参考図書を見てもよし、仲間同志相談してもよし（但し、同じ答えは出ないようになっている）。ドイツ語の三井教授の場合、テストに辞書使用可、又卒業成績は本人の希望の評点にしてくれた（ふさわしい自覚はもってくれとの注意はあつた）」（一一機四外）とか「物理学担当の理博士木戸潔教授のテストの時は、先生は教室にはおられず、本人の自主性にまかせた」（九三電五東）というように、学生の自覚を促す自由教育の方針で実施されていたのである。「前には良い点をとるだけのために一夜漬けの猛勉強したのであるが、この学校ではその必要が全くなかつた」（二二応四東）けれども、鈴木校長の「学生は試験があるとその為に勉強する様になるので無試験とする、然し学生は卒業後は実社会では毎日が試験のような物であることを自覚して、自らの将来の為に自発的に勉強し、常に正しい判断が出来るように自らの教養を高めなければならない」（二六八機五外）という訓話が無試験の方針とともにしっかり記憶されているのである。

無採点に関しては、学生間のほのぼのとした交友関係が保証された点に記述が集まっている。「学生を点数で評価するようなことはなく、したがって誰が一番だとか、自分が何番の成績だったかなどは関心がなかつた」（五四建四東）、「席次がないので自分が何番になろうと劣等感もなく、級友一同、平等なつきあひが出来た」（二〇応四東）、「成績の順位はなかつたので、学生間の学業競争意識はなく、なごやかな学業・生活共同体の中で育つことが出来た」（二〇九造五外）、「クラスメート全員が非常に仲がよい様に思ふ。それは自由主義教育のお陰で点取り競争でなく、互助主義精神でお互いに助け合いの学生生活だったからだと思ふ」（九四電五東）といった回想がそれである。逆に「各単位科目を、仮に採点して総点数や平均点を算出したり成績序列を作ってみても、本人の学業や全

人格的将来性になんの参考にもならぬことを感じた」(三〇応四外)学生もいた。ただし困るのが就職段階での成績表の提出であった。「就職に際しては会社から学業成績表の提出を求められるが、試験がないので成績表がない。先生と相談して、甲、乙、丙のランクで記入する。勿論甲が多い。成績順は一人で行く時は一番か二番、二人で行く時は一番と二番を記入した。会社に出された成績表はその時その時で違っていた」(八一応五外)というエピソードは愉快である。

学生思想問題 無賞罰は「在学三年間を通じ生徒の処罰は一件もなかった」(二機四外)という。ひとくちに無賞罰への対処 罰といっても、学生の受けとり方はさまざまである。「学年末や中間に於いて、先生が突然〇曜の

〇時間にTESTしますと宣告をうけ試験される。学生が無試験方針に反すると抗議し教室に出席せずラグビーをやった事がありました。結局話し合いで決着し無処罰でした」(五九造四東)とか、「浜の早慶戦と言われた高商との野球に勝ち、応援の帰途、七、八名の仲間と元気にまかせて伊勢佐木町を放歌、スクラム等で練り歩き、伊勢佐木署に連行された。校長の計らいで無事釈放となった。後で校長からの注意を覚悟していたが、事なくすんだ。ああ、これが自由啓発教育だなぁと思った」(七三機五外)といったレベルから、「クラス中に左翼派の学生があり、デモ行進中に虎ノ門署に拘留された。その生徒を鈴木先生が自ら引受けに行かれ、その後も何の処分もしなかった」(三三応四外)といった、この当時に問題とされた「学生思想問題」のレベルまでさまざまなのだが、無賞罰、無処罰に関しては後者の例を印象的にあげる対象者が非常に多い。ある学生は「一年の時(昭和六年)だった。その時代は軍国主義が強まる一方で、時々共産主義者狩りが行はれていたが、その時は大規模な粛清が行はれ学生部門では本校の学生も数名の検挙者が出た模様だった。機を移さず、鈴木校長が壇上に立たれ之に対する話がなされた。今回の粛清にあたり、本校からも該当者が数名出たこと。私(鈴木校長)は当局へ出向いて学生の将来に互って一切の責任を負ふとの約束をして全員の身柄の貰い受けをしてきたこと。今この会場にその学生

達もいること。そしてその学生は誰かなど詮索は一切しないで欲しい。平静にしていって欲しい。恩情あふれる熱弁が続いた。講堂のアチコチに感涙に咽ぶ声がかかれた。正に先生と師弟関係の極致であった。結局あとになつても、その時の数名の友は不詳のままだった」(五〇建四横)と、具体的にかつ鮮烈な印象をもつて記述している。「他校ではこれらの学生を殆ど退学処分にしたが、横浜では一人も退学させられていない。鈴木校長は『道を誤つた学生を正しい道へ戻すのが教育であつて、それを放逐することは教育の放棄である』と言われた。三無主義は世間へアピールする単なる標語ではなく本当の教育理念であつた」(六五機五神)と、鈴木校長の教育信念として理解され強調されている。「官学では他に例がない」ばかりでなく、「この問題で他校を追放された人の入学を許可」(八五応五横)するという教育的な処置に、鈴木校長には自分もそのように対処してもらえろのだという信頼感を築きながら、学生たちは校長の無処罰の方針に共鳴していた。

自由と自主 いずれにしても、アンケートの記述には「自由」とか「自主」といった言葉が頻出する。「校舎が**の尊重** 関東大震災後のバラック建築であつた事が、かえつて自由教育と妙に調和してのびやかな教育の

場という思い出として残っている」(五七造四東)とか、「自主管理が出来るように自然になった。とにかく猛烈に勉強せざるを得ない雰囲気になつていた」(九五電五外)、「出席は採らなかつた。授業の雰囲気は常にのびのびとしていた。自主性と本人の自覚を重んじていた」(二五応四神)、「実験に失敗しても二回三回とすることが出来た。自由にまかせて下された」(二四応四東)、「自由な時間、例えば夜間など教室に於て設計図を書く事ができた。塾のような教育方針」(五三建四東)といった授業にまつわつた回想が続いている。そのような授業から、学生は「学問よりも学問の仕方を教えられた」(四〇電四東)のである。⁽¹⁷⁾その他、クラブ活動についても「クラブ活動を通じて学内の上、下級及び横断的交遊の關係が自然に出来た」(六八機五外)こと、この当時重視されていた軍事教練について「軍国主義の世の中にありながら、教練にも柔軟性があつた」(二三応四外)ことなど、数々の興味深い体験が

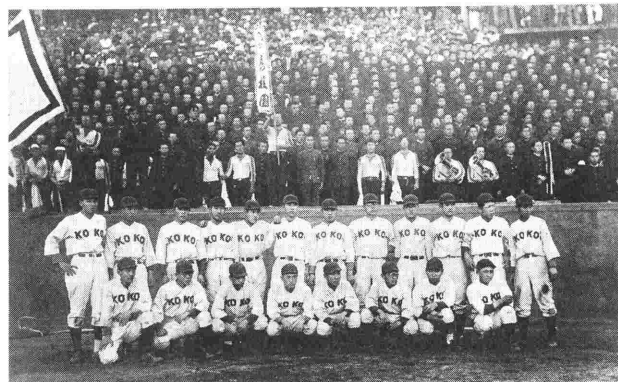


写真193 高商との野球定期戦に勢揃いした高工ナイン

語られているが、ここでは割愛せざるを得ない。

ハマの早慶戦と記念祭

横浜高工は、横浜における最高学府のひとつであり、鈴木校長の方針もあって、市民に理解され開かれた学校たろうとしていた。また学生たちの出身地は、東京、神奈川を中心としながらも、全国各地に散らばっており、そのような学生たちにとって、三年間の学生生活を横浜で送ったことの違いが、期せずして描かれている。横浜高工と横浜あるいは学生たちと横浜について、少しふれてみよう。

横浜高工が市民にふれる二大イベントは、ひとつは「ハマの早慶戦」と言われた横浜高等商業学校との定期戦であり、ひとつは毎年恒例の記念祭であった。当時は職業野球(プロ野球)ではなく学生野球が華々しい人気を誇っていた時代であった。学生が「浜の早慶戦と云はれた高商との野球はどんなに高工生活にうるおいと花をそえたかはかり知れない。私も応援団旗を振って応援をした」(九六電五東)、「毎年行われる横浜高工対横浜高商の野球試合の応援には、全校あげての熱狂に学生生活の青春を謳歌した」(二九機四横)、「高商との野球定期戦で三年間負け続けたが、選手と応援団が一体となって戦い、共に涙し横浜球場から弘明寺まで引き揚げた」(三六応四神)と、青春のひとつこまとして印象深く語っている。市民にとっても横浜を二分するかたちで盛り上がり、横浜球場は毎度興奮の坩堝となっていた。また、一月上旬の「市民との融和も重視された」(六六機五横)記念祭も、市民との恒例の窓口であった。記念祭は、弘明寺キャンパスにおいて「全校全科一致協力して校内開放を行った。日頃学んだことを来訪者に還元することを目

的とし、市民の理工系教育に努め」(六三機五横)ようとしたもので、「市民の多くの方々に科学に関するPRをした事が有意義」(九三電五東)であった。なかでも仮装行列は人気があり、「浜の名物になっていった」(二〇二建五横)。建築学科の「中村順平先生の指導の下で、一年〜三年生全員、仮装行列に参加し、弘明寺を出発して伊勢佐木町の大通りを行進したこと。仮装の趣向は毎年変わり、『文芸復興』その他で山車や仮装の衣装、旗差物等すべて生徒が全員で放課後に夜遅くまでかかって作った」(九九建五横)思い出が語られている。「神奈川県最高学府であった横工は県民の信頼に応えるのに、自由主義と言っても、出鱈目な学生はいなかった。一人一人が誇りを持って市民に接したことだと私は思う。開校記念日は全校開放し、工業の実体を披露したことなど、又市中に仮装行列を繰り出して市民と触れ合ったことなど印象が深く残る」(二〇四東)と学生側の確信もあれば、「横浜市民が高工生に対して、常に親しみの眼を向けてくれた」(六〇造四外)という市民のまなざしも温かかった。「高工と高商が官立であり、大学はなかったから、市民から何かにつけて好意的に遇され、我々も自覚して誇り高く生活した」(二一機四外)のであった。

また、横浜それ自体に対する想いも、いろいろな次元で語られている。北海道出身の学生は「初めて横浜に出ました。山下公園、外人の住居一帯、伊勢佐木町の散策オデロン座、ラーメン屋」などの雰囲気は若者の眼を開かせる強烈なものばかりでした」(二九応四外)と鮮烈な第一印象を語り、「横浜の地の利は自然に身につけ、世界に眼を向けなければならぬことを学んだ」(九六電五東)学生もいた。「横浜の美しい『港町』が私の生涯に大きな影響を与えたと思う。『横浜市歌』は今も尚私の愛誦歌である」(一〇九造五外)と横浜との出会いを語る岡山県出身の生徒もいれば、「横浜港には友達とよく行った。別に訳もなく行った」(六七機五外)という学生もいる。さらに「横浜の学生生活が私にとって今日まで『人の縁』『人間の運命』に不思議な係わりをもっている。昭和八年三月日本は『日本軍の満洲からの撤退勧告』をうけてこれを拒否し国際連盟から脱退した。その時の日本全権大使

松岡洋右は六月に横浜港に帰って来た。その時の熱狂的な歓迎は凱旋將軍を思はせるもので、今も鮮明に思い出される。一般国民、学生は小学生まで、日の丸の旗を振って、僕も横浜埠頭に松岡全權を迎えた」（七一機五外）と、自分の生きた時代に横浜が刻まれている。このように、横浜高工というひとつの学校は、横浜市民とのかわりで、また横浜という地においてはじめて成り立っていたのであり、このことは横浜高工の校風を形成する潜在的ながらも重要な要因であった。

学校生活 アンケートではさらに、横浜高工で学んだことが卒業後自分の生き方に何らかの影響を及ぼしたかの影響力 どうかを尋ねている。回答は未回答の四名を除いた一〇八名中一〇二名（九一％）が、何らかの影響をもったと答えている。その内容は「自由啓発主義は生涯教育（生涯学習）のための力強い基盤づくりを構築してくれた。これは日進月歩の技術開発に追従して行くために力強い支援となった」（六機四横）、「自由教育は自身の天性を伸ばしてくれた。詰込採点教育でなかったため、私の生涯教育の基礎を作ったと思う」（二〇応四東）、「試験勉強という形の勉強はしなかったが、自主的に教科書の内容を充分理解することができたので、社会生活の上でも「とらわれない」「ごだわらない」大らかな生活態度が得られた」（七機四外）、「困難にさいした時その他すべての場合に自覚することを忘れなかった」（二六応四外）、「人生は自己啓発の連続であることを体得した」（三六応四神）、「校長の講義の中で『人間を採点して評価することはできない』との一言があり、自分も会社生活の中で常にこのことを念頭に人に接するよう心掛けた」（七四機五外）と、高く評価されていると同時に、その記述が具体的である点が注目されよう。来たりくる軍国主義の時代に「自由主義が身にしてみても戦時中軍国主義になじめなかった」（五六造四外）、「三井に入社し軍国主義の時代に、表面だって反対は出来なかったが、自由主義の思想を一生持ち続けた」（八三応五横）という卒業生もいた。鈴木校長の三無主義教育の教育方針と自己啓発教育の主張、そしてその徹底した実践によって、人生に与えた影響が具体的に語られているのである。一般的に教育の効果は即断

できないといわれるが、横浜高工で学んだ学生たちにとって、その三年間の教育が、その後の人生において意味ある実質を持ち続けたのは間違いないことであろう。

鈴木校長の退任

この学生たちが入学し卒業した時代は、『横浜国立大学工学部五十年史』（一九七三年）によれば、「校運ますます隆盛」の充実期として描かれている。それは学生の実感に即して言えば、「昭和六年満洲事変が始まり、学校では軍事教練の時間がふえた。治安維持法の波が学園にしのびよったようだった。世は不景気で学校を終えても就職の出来ない時代であり、街はエログロナンセンス時代、本牧にはチャブヤあり、ダンスホール、バー、カフェ等々がはんらんしていた」（五二建四神）時代から、「軍需景気の波に乗り、工業学校黄金時代 就職明朗戦に爆笑¹⁸」の時代への移行期にあたっていた。一九三四年三月一五日、ある学生の卒業式の日記には「やっと沈滞していた景気が上昇し始め、卒業生も愁眉を開いた格好だったが、それは満州方面から巻き起こったいわゆる軍需景気だったのである。しかしそれまで四苦八苦していた庶民にとっては天の恵みで、高工の卒業式に前陸軍大臣荒木貞夫大将が来て話をするとあつては、一般の人々も式に参列して講演を拝聴したのも当然である」（二四機四東）という一文が書かれてあった。

そして、この時代は同時に、校長鈴木達治の最後の時期でもあった。在職一五年、齢六五歳、これは鈴木校長にとって自らの出処進退を明らかにするこの上ない機会であった。一九三五年二月二四日、講堂において「退職の経緯を語る」と題した講演を行っている。この講演を聞いた学生は、「私が卒業の年（昭和一〇年）、鈴木校長が学生全員を講堂に集められ、突然校長をやめると発表されました。私達は寝耳に水でビックリし、終わり頃にはあちこちすすりなきの聲が出始めました。それ程、全学生から慕われていたわけです。その時の一言が今もはっきりおぼえています。『人間は出処進退が一番大切である』…一生忘れることのない教訓です」（九九建五横）、「昭和十年二月全教官と全校生徒を前に突如校長が退任の決意を表明されたのである。我々にとっては全く晴天の霹

靈であり、特に一ヶ月後の卒業式をひかえてのこの仕儀には何とも納得致し難く、悲觀の極に達した。校長は『六十五才を迎え且つ本校創立十五周年となつた今、退任することが時宜にそくしたものであり、私自身『疾きこと風の如く』対処したことであり、願わくば諸君は『静かなること林の如く』対処されることを望む』と諄々と論された。鈴木校長の卒業証書を授けられぬことを思い合わせ、唯茫然としてなすところがなかつた。在学中の最も痛烈な出来事であつた」（九七電五神）と、衝撃をもつて事態に直面していた。鈴木校長の日記にも「高工健児泣く。余も又斯くの如くするかと感激極まりなし」と記されていた。横浜高工開校以来、一貫して自由教育を実践してきた鈴木達治は、『横浜高工時報』の次のような記事に見送られながら、学校を去ることになった。¹⁹

大正九年吾が横浜高工創立以来全校的信望を負ふて、吾等が父として敬慕されて居た鈴木校長は、去る二月十三日突如として学園より去られるに至つた。凡々たる機械的職業教育の風潮の中に、毅然としてかゝる傾向を排して横浜の一角より自由啓発主義なる新しき教育的指導原理を唱導し、幾多盤根錯節を打ち碎き光輝ある自由の孤城を固守し、しかも一切の社会の批判に超越し只管自己の信念貫徹に勇氣と情熱とを以て邁進し来たつた巨人鈴木先生の辞職は、全校友の胸に悲痛な哀別の苦惱を与へたのである。しかし自ら異端者的教育者を以て任じ総て理論を越えて自己の信念により人の意表に出づるを得意とした鈴木先生のかくの如き突発的辞職には、吾等は風格躍如たる鮮やかなる転換として寧ろ賞賛の辞を呈せねばならぬであらう。

アンケート対象者の卒業と同時に、横浜高工のひとつの時代が終わつた。

(一) 鈴木達治校長の自由教育觀の形成過程や横浜高工の自由教育実践の特質については、拙稿「鈴木達治の自由教

育観とその実践—横浜高等工業学校の三無主義教育—」(『市史研究よこはま』第四号、一九九〇年四月)を参照されたい。

- (2) 鈴木達治述 『自由教育の俤 無採点無処罰主義』(横浜高等工業学校、一九二九年九月) 一六頁。
- (3) 鈴木達治述 『自由教育の俤 無採点無処罰主義』二〇～二二頁。
- (4) 「一君万民主義」(一九三二年三月・第一〇回卒業式にて。『自由の翼 煙洲会五百回記念』一九八六年八月) 四二頁。
- (5) 煙洲鈴木達治述 『自由主義教育の思出(無試験無採点無賞罰)』(横浜工業会、一九五四年) 六頁。
- (6) 煙洲鈴木達治述 『自由主義教育の思出(無試験無採点無賞罰)』七頁。
- (7) 口頭試問と人物考査の入学試験に筆記試験が加わるのは、達治が校長を辞任して後の一九三七年度入学生に對してからで、受験生の増加がその最たる理由であった。ただし「自由啓発の大精神揺がず」と強調されていた。(『横浜高工時報』第二四二号、一九三六年一月二日、一頁)。
- (8) 煙洲鈴木達治述 『自由主義教育の思出(無試験無採点無賞罰)』八～九頁。
- (9) 鈴木達治述 『自由教育の俤 無採点無処罰主義』二六頁。
- (10) 「名教自然と雅号由来」(鈴木達治 『入愚亭独嘯』一九四二年八月) 三六四～三六五頁。
- (11) 煙洲鈴木達治述 『名教自然俤の由来と教育私見の断片』(一九五七年) 五～六頁。
- (12) 鈴木達治述 『自由教育の俤 無採点無処罰主義』六頁。
- (13) 鈴木達治述 『自由教育の俤 無採点無処罰主義』五四頁。
- (14) 一九三四年三月、三五年三月卒業者の聴き取り資料を収集するにあたっては、生産工学科同窓会(旧機械工学科同窓会)、横浜応化会、横浜電化材会、水煙会(建築科)、弘陵造船航空会の各卒業生名簿から両年度に該当する卒業生二六〇名のうち物故者や住所がわからない方を除いた二〇〇名を対象に(三四年九五名、三五年一〇五名)に、一九九〇年一月に郵送によるアンケート法を実施した。有効回答数は一一二(三四年六二、三五年五〇)で有効回答率は五六%であった。アンケートの引用の仕方は、引用の後に整理番号を付し、次に五学科が区別できるよう機械工学科には「機」、応用化学科には「応」、電機化学科には「電」、建築科には「建」、

造船工学科には「造」を付した。そして卒業年度別に一九三四年卒業者は「四」、三五年卒業者は「五」と記した。さらに中等学校の所在地別に横浜市内の場合には「横」、神奈川県内の場合には「内」、東京府の場合には「東」、それ以外を「外」とした。アンケートの設問は割愛する。このアンケート調査には煙洲会幹事の村松四郎氏に協力していただいた。対象者は、機械工学科三四名、応用化学科三〇名、電気化学科一八名、建築科一四名、造船工学科一六名の一二二名で、横浜市内中等学校出身者が一五名（横浜一中、二中、三中、神奈川工業、商工実習、浅野綜合）、神奈川県内中等学校出身者が七名（横須賀中、小田原中、川崎中、藤沢中）、東京府内中等学校出身者が三七名、その他が五三名であった。五三名の出身地は、北は北海道、南は沖繩に至るまで二七道府県にわたっていた。ほとんどが中学校の卒業者であるが、長野工、米沢工、岩手工、静岡工など工業学校出身者が一〇名含まれている。

(15) 『横浜国立大学工学部五十年史』（一九七三年）一〇五頁。

(16) 鈴木達治の自由教育観の特質についてはここでは触れない。ただ興味深い二つの記述のみを紹介しておこう。「鈴木校長は自由主義者であっても、所謂自由主義者とは趣を異にしていた。どちらかと云えば右よりの自由主義者で、卒業式の際の記念講演者に荒木陸軍大将を選んだり、五・一五事件の軍法会議の判決（首謀者数名に死刑）に対し、全校生徒を前に青年将校は日本の現状を憂いた純真さからおきたものであり、死刑に処すべきではないと述べる程だった」（五五造四外）と「自由主義と自由啓発主義とはいささか異なるように思いますが。啓発とは高工の学生として日本国民としてどうあるべきかを学びとり、それに向かって自分を律しながら精進して行くことだと思っていた」（五八造四外）である。

(17) もっとも極めて数少ない事例であるが、「この主義を真に理解して勉強する学生は極めて少なく、大部分の学生は放漫にながれ専門教育が身につかず、学生生活三年間を青春謳歌で遊び暮らしてしまいます」（一九機四横）という記述のあることも付記しておく。

(18) 『横浜貿易新報』（一九三四年九月二八日）。

(19) 『横浜高工時報』（第二二二号、一九三五年二月二五日）別刷。

写真174	メーデー取締りのための警察署長会議 1934年4月 県庁警察部長室	1129
-------	--------------------------------------------	------

第3章

写真175	御大礼奉祝塔 桜木町駅前	1153
写真176	「御前体操」 1929年4月23日 横浜小学校校庭	1158
写真177	御真影の到着を迎える児童 1938年10月26日	1162
写真178	旭小学校の奉安殿	1165
写真179	「教育勅語まんだら」 教育勅語を図解して掛軸にしたもの	1168
写真180	旧本郷小学校の二宮尊徳像	1175
写真181	石川小学校の防空演習 1936年	1189
写真182	『教育研究紀要』 表紙	1200
写真183	中区中村町(当時)にあった横浜中央教材園	1202
写真184	間門小学校旧校舎 手前左側の建物は1958年に設けられた 付属海水水族館	1219
写真185	間門小学校定例の身体検査	1222
写真186	平戸喜太郎(1887年生)とその家族	1235
写真187	石川小学校の卒業生たち 1932年	1240
写真188	石川小学校全景 1931年ころ	1251
写真189	新聞報道にみる青少年の犯罪 『横浜貿易新報』1934年6月20日	1325
写真190	前田幸太郎(1883~1965)	1351
写真191	フェリス和英女学校中等部卒業式 1936年	1366
写真192	鈴木達治(1871~1961)	1380
写真193	高商との野球定期戦に勢揃いした高工ナイン	1391